

東海道品川宿名所図会

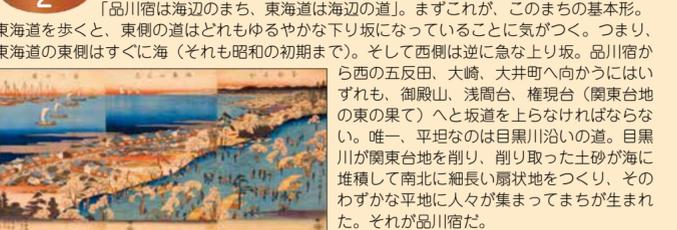
公式 品川宿まち歩きマップ

品川宿ちよっと深掘り 12ホールズ

ホール1 それは1千年前の湊から始まった
品川宿は寺町でもある。周辺の寺院の数はなんと30ヶ寺。そしてその多くは創建年代が1200年代から1300年代に集中している。つまりもうその頃には一帯に多くの人が住み、まちが形成されていた証拠。

品川宿はおおよそ1000年前(平安時代)頃から、南品川の沖合の天然の良湊を起点に発展が始まる。物流の主役が海上輸送だった時代、湊は大変重要なインフラで、政治・経済・文化の中心であった関西方面から運ばれてくる物・人・情報は、ここ品川宿に集積し、ここから関東一円の各地へと陸路運ばれていった。この物流の中心として品川宿は、鎌倉から室町時代にかけて繁栄の頂点を極めている。

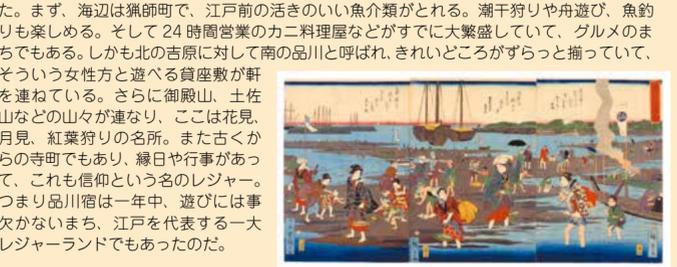
ホール2 海辺のまち、海辺の道
「品川宿は海辺のまち、東海道は海辺の道」。まずこれが、このまちの基本形。東海道を歩くと、東側の道はどれもゆるやかな下り坂になっていることに気がつく。つまり、東海道の東側はすぐに海(それも昭和の初期まで)。そして西側は逆に急な上り坂。品川宿から西の五反田、大崎、大井町へ向かうにはいずれも、御殿山、浅間台、権現台(関東台地の東の果て)へと坂道を上らなければならない。唯一、平坦なのは目黒川沿いの道。目黒川が関東台地を削り、削り取った土砂が海に堆積して南北に細長い扇状地をつくり、そのわずかな平地に人々が集まってまちが生まれた。それが品川宿だ。



ホール3 東海道は400年来の歴史遺産
徳川家康が天下を統一し幕府を開くと、江戸を中心とした国土の大改造が始まり、品川宿は宿駅伝馬制のもとで東海道の第一の親宿と定められた。この時に整備された東海道が、400年を過ぎた今日でも実は、その道幅、線形、起伏など、基本的には当時のまま変わらずに残されている。また、狛師町の鎮守・寄木神社の前を通る「別崎道」も、さらに品川宿のすべての横丁(例えば、清水横丁、台場横丁、青物横丁など)についても、同じことがいえ(いくつかの路地は拡幅されてしまったが)、これは現代の東京にあって奇跡といえる。

品川宿も海側は埋め立てが進みすっかり様変わりしたが、内陸部は実はほとんど変化していない。このようなまちはもはや極めて希少で、400年変わらぬこの東海道と横丁、そして多くの路地の、品川の貴重な歴史遺産といえよう。

ホール4 お江戸の一大レジャーランド
品川宿は江戸時代に宿場町として栄えたが、これがただの宿場町ではなかった。まず、海辺は狛師町で、江戸前の活きいい魚介類がとれる。潮干狩りや舟遊び、魚釣りも楽しめる。そして24時間営業のカニ料理屋などがすでに大繁盛している、グルメのまちでもある。しかも北の吉原に対して南の品川と呼ばれ、きれいだころがざらっと揃っていて、そういう女性々と遊べる貸座敷が軒を連ねている。さらに御殿山、土佐山などの山々が連なり、ここは花見、月見、紅葉狩りの名所。また古くからの寺町でもあり、縁日や行事があって、これも信仰という名のレジャー。つまり品川宿は一年中、遊びには事欠かないまち、江戸を代表する一大レジャーランドでもあったのだ。



品川宿の賑わいを描いた歌川国重の二代(品川歴史館蔵)

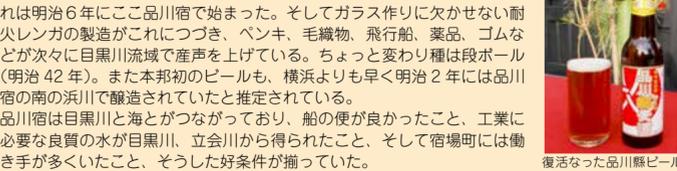
ホール5 名所図会にも描かれた銘水
品川宿を歩くと、あちこちの路地で井戸に出会う。1千年も前からこのまちに人々が住むことができたのはこの水、関東台地がもたらす豊かな地下水があったからに他ならない。品川宿では昔から4、5メートルも掘ればいい水が出るといわれるが、かつては多くの船が、外洋に出る前に品川宿で良質な水を求めたため、水を売る水屋が成り立つほどだった。そんな評判の銘水を描いたのが、江戸名所図会「磯の清水」だ。

江戸名所図会 磯の清水(品川歴史館蔵)

ホール6 品川宿は鉄道のみち
明治5年5月7日(現在の暦で6月12日)の日は日本で初めて鉄道が開通し、第一号列車が品川駅(初代は八ツ山陸橋のすぐ北にあった)から横浜へ向けて出発した記念すべき日である。それは新政府が鉄道建設を決定した日から数えてわずか2年半そこのことだった。海上に土手を築き、山を切り開き、川に橋を懸ける難工事の連続で、これを指揮した鉄道頭の井上勝や、イギリス、フランスからのお雇い外国人技師、そして工夫たちのまさに不眠不休の働きがあつてのことだった。まちは井上勝の墓(大山臺地)を始め、大正2年の八ツ山橋の親柱、碑文谷地蔵(天龍寺)、京浜鉄道犠死者供養塔(海蔵寺)などなど、鉄道にまつわる遺構も数多い。



ホール7 日本の近代工業は、品川宿から始まった
日本で最初の近代工業はガラス製造といわれているが、それは明治6年にここ品川宿で始まった。そしてガラス作りに欠かさない耐火レンガの製造がこれにつづき、ペンキ、毛織物、飛行船、薬品、ゴムなどが次々に目黒川流域で産出を上げていく。ちよっと変わり種は段ボール(明治42年)。また本邦初のビールも、横浜よりも早く明治2年には品川宿の南の浜川で醸造されていたと推定されている。品川宿は目黒川と海とがつながっており、船の便が良かったこと、工業に必要な良質の水が目黒川、立会川から得られたこと、そして宿場町には働き手が多かったこと、そうした好条件が揃っていた。



ホール8 一年が祭りで回るまち
品川宿では老若男女の別なく、誰もが「一年は祭り」で回っている。祭りこそ人生」と言う。祭りは毎年、品川神社(北の天王祭・北品川)と荏原神社(南の天王祭・南品川・東品川)の両社がそれぞれ、おおむね6月7日に近い金、土、日の3日間にわたって執り行う。祭りの主役は何といっても神輿。宮神輿の他に各町会の大型の神輿が、北は全7基が、徳川家康奉納の赤い「天下第一の面」を、南は全13基が、御神面の黒い「須佐之尊尊の面」を掲げて、伝統的な品川拍子のリズムに合わせて渡御する。北のハイライトは、神社の急な53段の石段を上って次々に宮入り。またこの石段を下って各町会へ出御するシーン。また一方の南のハイライトは、13基の神輿が神社前の桜河岸に集結し、東海道を連合して渡御するシーン。なお江戸の奇祭のひとつ「かっぱ祭り」は、荏原神社の末社・寄木神社の神輿がお台場で海中を渡御し、御神面を海に還して海上安全と豊漁、五穀豊穡を祈願する神事。これも必見だ。



祭りがなくて、神輿がなくて、人生なし。

ホール9 「形」にこだわる品川っ子気質
品川宿の人たちは好んで「品川っ子」という言葉を使う。自分たちは江戸の外人間で江戸っ子ではない。品川っ子なのだ。つまりそれだけ、自分の生まれ育ったまちに強い誇りを持って日々暮らしている、とてもハッピーな連中なのである。品川っ子は、何はさておき祭り好き。彼らの祭りとは、第一に氏神様の例大祭、そして秋のお会式だ。

祭りにはそれぞれの決まりの「形(なり)」がある。着る物、持ち物など有形のものから、所作、付き合いなど無形のものまで、伝統的な決まりごともある。仲間の暗黙の決めごともある。この「形」が自然にできるようにすれば、一人前の品川っ子だ。決まりごとは窮屈なようで、普通に守りさえすれば実はかえって楽で、居心地の良いものである。この品川っ子気質も、やはり無形文化財だ。

ホール10 品川宿における南北問題
品川宿を南(南品川宿)と北(北品川宿)とに分断して流れているのが目黒川。この川を挟んで品川宿では昔から南北対立が絶えない。それぞれ氏神様を異にし、祭りが別々に執り行われること。さらに、北品川宿が商人を中心としたまちであるのに対して、南品川宿は職人中心のまちであることなどが要因とされている。現在は、まちづくり協議会の活動などによって、南北共同で「宿場まつり」を開催したり、共通デザインでまち並みを整備したり、融合も図られている。しかしこの対立は昨日今日でどうなるものではない。むしろその対立をパワーに、これからも大いに対抗心を燃やし、このまちを盛り上げてほしいものだ。

ともあれ21世紀の世の中、東京の片隅にまだそのような対立があること自体、これも貴重な文化遺産といえよう。品川橋を渡るときには、この北と南の関係をちよっと思い出していただきたい。

ホール11 豊饒の海から新しい品川っ子が
江戸300年の平和が破られ品川宿も激変した。黒船の来航に備え幕府は品川浦と江戸湾を埋め立て、台場を築いた。この時に御殿山の土砂が大量に投じられ、桜の名所として知られたお山が消えた。そして関東大震災後には海岸部に運河が整備され、さらに日本の工業化とともに埋め立ては進み、京浜工業地帯が生まれた。そして東京オリンピック(1964年)を前にモノレールや高速道路が建設され、狛師町は漁業権を放棄、ついに品川宿から海が消え、工場が残った。しかしその工場も徐々に地方へ、海外へと移転していき、21世紀を前に高層オフィス、マンションが次々に建って、地下(海底!)には鉄道が走り、シーサイドフォレストが生まれた。そして今、品川宿はこのマンション群に居住する人々と、まちづくり活動を共にするハッピーに恵まれているのだ。あの豊饒の海が、品川宿に新しい品川っ子をもたらしてくれた。海に感謝!

新しい品川っ子(なぎさの会)によって開催される「しながわ運河めぐり」

ホール12 「みこしだこ」をつなぐまちづくり
品川の神輿は大型で、担ぎ棒も太い。担ぎ手はその横棒に神輿をせり上げるように肩を入れるために、首と肩の間に大きなこぶができる。このこぶが「みこしだこ」。これこそ神輿好きの品川っ子の勲章、誇りだ。

1988年から品川宿のまちづくりに取り組む「旧東海道品川宿周辺まちづくり協議会(略称:まちづくり協議会)」は、この品川っ子の誇りの継承を意図して「みこしだこを次の世代へつなげるまちづくり」というキーワードを掲げ、「100年後の品川宿の子どもたちに祭りが続けられるまちをつなぐ」をテーマに、日々、まちづくり活動に取り組んでいる。

これが、みこしだこ

1988年から活動をつなぐ「まちづくり協議会」

だれでもウエルカム、どんな提案もオーケー、すべてオープン!

それがモットー。品川宿では周辺の全町会、全商店街の参加のもと、ソフト、ハードの両面からまちづくりに取り組んでいます。このまちに興味をお持ちのみなさん、ぜひ私たちの活動にご参加ください。みんなでまちづくりを楽しみましょう!

さらに深掘り! まちづくり協議会のホームページ、YouTubeチャンネル「品川宿まちづくり」もぜひ、お楽しみください!
https://www.toukaido-shinagawashuku.com/ →

まちづくり協議会の活動(正式名称:旧東海道品川宿周辺まちづくり協議会)
東海道 品川宿交流館
1階 本宿お休み処 駄菓子屋またあした 2階 品川宿の歴史と文化を知る展示室
住所:140-0001 品川区北品川2-28-19 電話:03-3472-4772 FAX:03-3472-4770
Eメール:machikyowest.cts.ne.jp 月曜日休館(祝祭日の場合は翌日休館。10時~16時)

● 人と人、人と地域をつなぐ
品川宿交流館(本宿お休み処、駄菓子屋またあしたを併設)、旧交番(南品川櫻河岸まちなか観光案内所)の運営を通じて、品川宿を訪れるみなさんとこのまちの歴史、文化、そして地域のみなさんとの出会いの場をつくる。

● 友好をつなぐ 街道松をつなぐ
東海道57次の各宿場町やジュネーブ市をはじめ、鹿児島、草加、郡山など、各地のまちづくり団体との交流を進め、親睦を深める。

● まち並みをつなぐ 灯りをつなぐ
景観計画によって、まちを品川宿らしい修景で整え、統一感のあるイメージでつなぐ。子どもたちが参加する「灯籠プロジェクト」が、路地に灯りをともし、まちをつなぐ。

● 品川っ子をつなぐ 地域をつなぐ
品川宿で共にコミュニティ活動に取り組む多様な人々と力を合わせ、次代の「品川っ子」を育て、地域づくりを継続する。

● 水辺をつなぐ 文化をつなぐ
品川宿の歴史、文化を伝え、品川っ子の古き良き遊びの伝統を次代へ継承する。

● スポーツでつなぐ
みんなでスポーツのあるコミュニティを楽しもう! 少年サッカーをはじめ、「しながわホッケーファンゾーン」の活動などを介し、スポーツによるまちづくりに取り組む。

● 活動をつなぐ
会員向け会報「みこしだこ」(年2回発行)、ホームページ、「まち歩きマップ」の発行、各種リーフレットの発行、出版などを通じた広報活動に取り組む。

「品川宿らしい街なみをつなぐ」建物に、補助金使えるケースがあります。
東海道・北馬場通り・南馬場通り・ジュネーブ平和通りに面した建物で、東海道にふさわしい街なみづくりに貢献する工事の費用の一部を助成しています(ご相談は下記まで)。この制度は「東海道の歴史と文化を伝え、賑わいを創出する景観づくり」を目的としており、新築・外観変更等の工事の際には、事前に景観アドバイザーへ相談の上、景観法の届出が必要です。まちづくり協議会は、品川区景観計画の策定に参画し、現在は景観アドバイザーを区に派遣しています。

問い合わせ先:品川区都市環境部都市計画課景観担当 03-5742-6534

品川宿の暦

1月	1日	初詣	各神社
毎月	2日	新春餅つき大会	品川神社
	28日	御縁日 ほうろく灸	一心寺
2月	3日(立春)	節分の豆まき	各神社
	11日または初午に近い日曜	初午	各稲荷社
3月	27日, 28日	千駄舞神 春季大祭	海雲寺
	初旬	しながわ運河祭り	東品川海上公園
4月	15日以降の日曜	春祭 太々神楽	品川神社
	13日に近い土・日曜	虚空蔵尊 春季大祭	養願寺
	30日	汐盛講(大國魂神社海上祓祓式)	荏原神社
5月	下旬~6月初旬の金曜~日曜	南の天王祭	荏原神社
		北の天王祭	品川神社
6月	30日	大祓い 茅の輪くぐり	荏原神社 品川神社
	1日	品川富士山開き	品川神社
7月	下旬~8月	盆踊り	各地
	最終の土・日	しながわ宿場まつり	東海道 八ツ山から青物横丁 川崎寺
9月		火渡り荒行	願行寺
	14日	十夜法会	願行寺
10月	16日	お会式 万灯供養	天妙国寺
	西の日	西市	荏原神社
11月	13日に近い土・日曜	虚空蔵尊 秋季大祭	養願寺
	23日	新嘗祭 太々神楽	品川神社
	27日, 28日	千駄舞神 秋季大祭	海雲寺
12月	31日	大祓い 茅の輪くぐり	荏原神社/品川神社
	31日	除夜の鐘	各寺院

● 東海七福神巡り
1月1~15日 2月3日(立春の日)
品川神社(惠比寿) 養願寺(布袋) 一心寺(寿老人) 荏原神社(大黒天) 品川寺(毘沙門) 天祖諏訪神社(福祿寿) 舞井神社(弁財天/大田区大森北2-20-8) この新春吉例は、玩具研究者で品川川に研究所を構えた有坂と太郎の発案による。

● しながわ宿場まつり
1990年に始まり現在もつづく品川区最大のイベント。北品川から青物横丁までの東海道2kmを会場に江戸風俗行列や全国各地の名物屋台、火渡り荒行などが展開。毎年10万人近い人々が賑わう。

● しながわ運河まつり
新しい品川っ子「なぎさの会」のメンバーが、東品川海上公園で2008年から始めた水辺のフェスティバル。春は桜、秋は火花をめでながら、目黒川クルーズや屋台、ステージイベントを楽しむ。



参考:「明治維新 in 品川宿」(品川区発行)など

公式 品川宿まち歩きマップ(附まちづくり活動)
全面改訂版2023年3月発行 初版1995年発行
発行:旧東海道品川宿周辺まちづくり協議会/品川区
編集/デザイン:インタメディア/アートポスト

表紙は、江戸名所図会(下から)「鈴の森」「品川駅」「貴船明神社」(品川歴史館蔵)で構成。上図中「中の橋」とあるのは、現在の品川橋。